宗教と科学

角井 宏

科学は仮説を立証することにより、真理を樹立できるが、宗教は顕示がなければ真理を樹立できないというのは、誤解である。バハイは各自独立に真理探究を指示されている。各自科学的方法で真理を樹立して行かねばならない。宗教者は、顕示に反してはならないが、顕示がないからといって、真理追求を怠れば、宗教は衰滅する。世界はいま転換期にある。例えば、気候温暖化、生態系破壊、森林衰弱、土地劣化、資源逼迫といった環境問題は、相互に絡み合い、個別に解決はできない。そこで環境工学という科学では、諸問題を要素ごとにモデル化し、如何なる対策が有効かを討議させ、大衆に理解させた上で、具体措置を決めるという手順を踏むが、そうした方法で、大衆に問題解決の着地点を知らせ、問題解決だけではなくて、着地点から現状を振り返るというバックキャスティングの姿勢を準備させている。宗教も在来のパラダイムでは解決しようのない、問題に絶えず当面しており、そうし事態にただ教義を繰り返すだけで、真理探究の大衆討議を怠ると、衰滅しかない。